

テーマ：差別のない世の中を目指して
～プロデューサーと猿まわし芸人 私たち夫婦にできること～
講師：栗原 美和子

平成23年5月26日（木）午後6時より、仏教伝道センタービル8階「和」の間を会場として、テレビドラマプロデューサー・作家として活躍中の栗原美知子氏が講演を行った。

栗原氏はフジテレビのプロデューサーとしてテレビのドラマ制作に携る傍ら、障害を持った身内と暮らしてきた体験から、テレビドラマで差別問題・人権にかかる問題を扱うようになったという。

そんな中、栗原氏は動物と人間が対等にかかわるドラマを作りたいと考え、猿回し芸人の村崎太郎さんにはじめて出会う。仕事が終わった時、栗原氏は村崎氏にプロポーズされ、同時に村崎氏から「自分が被差別部落の出身である」ということを告げられた。



講演を行う栗原美知子氏



参加者は熱心に講演に耳を傾けた

猿回しの芸は昔から行われていたが、戦後しばらくは途絶えていたという。その途絶えていた猿回しの芸を復活させたのが村崎氏の父親であり、村崎氏は父親から「お前は部落のスターになれ」と励まされたという。猿の次郎が行う「反省のポーズ」はお茶の間で人気になり話題を呼び、村崎氏はテレビ出演の機会も増え注目を浴びるようになった。

その成功の一方で、インターネット等では村崎氏が被差別部落の出身であることに対して心ない悪質な書き込みが続いていたという。

こうした差別の実態を、発信できる立場にある人間が発信すべきではないか、という使命感もあり、2008年に『太郎が恋する頃までには・・・』を出版、2人の体験を

赤裸々に同書で語った。それは大変な決断であったという。

しかし、2人の予想に反して同書はメディアでほとんど取り上げられる事はなく、親しい人たちからも「あんな本を出さないでほしかった」と迷惑がられ、大変精神的に苦しい思いをした、という体験を涙ながらに語り、参加者の心に強く響いた。

その後、村崎氏は出版をきっかけとして限界集落やハンセン病施設などを回り、猿回し芸を交えながら部落問題について語るという取り組みを続けている。栗原氏は講演等を通じて、部落差別は過去の話ではなく、現在進行形の未解決問題であることを夫婦で世間に訴えている。

3冊目の出版となる『橋はかかる』を2人で出版した栗原氏は、今後は東日本大震災の被災地を、次郎を連れて夫婦でまわるという。「被災者の人たちが少しでも笑顔を取り戻してくれたらうれしい」と結び、大きな拍手を浴びながら講演を終えた。

講演終了後には、希望者に『橋はかかる』のサイン会が行われ、用意した書籍が全て売り切れるほど盛況だった。



村崎氏と栗原氏共著の『橋はかかる』のサイン会が行われた